

南方（フィリピン）

呪縛の時代

兵庫県 松田 勇

私は大正十年に、岡山県の片田舎に生まれました。貧しい農家の五人兄妹の三男で、高等小学校卒業と同時に志を立て、大阪・名古屋・尾張一の宮と理髪師として修業をしまして、姫路市で職人として働いていました。

中国大陸における戦争は拡大し、ついに、太平洋戦争（第二次世界大戦）にと発展しました。国民精神総動員・物価統制・職業整理令等々で、個人の自由が束縛されて、すべてが軍国色になりました。

私にも昭和十六年四月に徴用令が来しました。「大阪陸軍兵廠・播磨製造所へ入所せよ」の命令です。説明会場には、当時鬼より恐い憲兵が二名来ていました。

誰一人文句もいわず、話を聞いていた。「質問がある者は申し出よ」といっても、寂として声なく。「一週間後に播磨製造所へ入所を命ず」で幕でした。

入所式当日は、まるで刑務所にも入るように、妻子と表門前で別れを惜しんでいる人もいました。入所後は集合訓練が十日程あり、数十名づつ分散合宿させられ、朝七時から夕方七時まで作業見習教育が行われました。

一か月後に、観閲点呼がありました。初めて一人前の軍属工員として各職場に配属させられました。私は十五トンの電気溶鉱炉でした。千数百度の高温で溶解

した鉄の熱湯です。これが大砲になったり、弾丸になるのです。砲身鋼の時は特に嚴重な分析を行います。

その都度、マンガン鉱とか、いろんな金属を混入して試験を行います。その都度、炉口を開いて、スコップで投入するのです。身体からは汗が滝のように流れるので、腹にタオルを巻いていますが、それを取って何度となく絞ります。塩分が不足するからと云って、水道の傍に岩塩とコップが用意されて、水を呑む時に必ず塩も一緒に呑みました。

電気炉は一分も休ませず操業しますから、自然勤務時間も二十四時間体制でした。一日二交代制で朝七時と、夕方七時の昼番と夜番でした。宿舎との往復、食事、入浴等々で自分の自由時間は八時間程でした。

八月のある日、宿舎に帰ると、故郷の母から電報が来ていました。

「召集令状が来た何日に姫路第五十四部隊へ入隊せよ」でした。即、舎監に申し出て、工事並びに担当の陸軍兵技中尉と同道して工場長の陸軍中佐に申告して故郷の岡山県へ帰りました。

家では長兄は軍属として輸送船で南方の島に行っていました。次兄は数日前に北支戦線より凱旋除隊したところでした。近隣の古老が「今度は兄に代わって不義を撃つのだ、頑張ってこい」と檄を飛ばされて、出征しました。

五十余年を経過した現在、往時を振り返って、何んの不思議、惑いもなく、滅私奉公に、ただ一途に突き進んだものでした。陸軍二等兵の軍服を着用して、帝國軍人としての本分を全うした。

初年兵で一番苦勞するのは、軍人勸諭と戦陣訓の暗記だった。私は前記の軍属の時に宿舎で同室であった二人が元軍人であったために、軍人勸諭と戦陣訓を教えられていて、両方共暗記していました。

一期の検閲直後に満州に向かって出動しましたが、出陣式の砌、時の部隊長・北園豊蔵大佐殿より、衆の範であると、全員整列の前にて表彰状を賜りました。以後この表彰状が私としては終戦まで重荷でした。たえず自分は出来るのだ。「やれるのだ」と自問自答し、心身を励ましてやりました。その結果玉碎的戦闘でも、

生き延びたのでしょうか。現在も不思議だと思っております。

満州国三江省佳木斯、満州第一二四部隊に昭和十七年十月十一日着任しました。在満期間一年九か月でした。その間の訓練たるや、たえず実践さながらの猛訓練でした。部隊は師団輜重隊で私の所属は第二大隊です。第一は挽馬大隊で、第二は自動車大隊です。戦争有事の時は戦時充当車両と云って（ガソリン）走行の立派な車両を特別に格納して、たえず万全の整備を行っていますが、日常訓練・演習には木炭や薪をつかって瓦斯を発生させて、それを燃料として、車を走行させるのです。今申し上げても理解に苦しまれるでしょう。この瓦斯発生装置の釜を運転台の背中に設置して、この瓦斯の発火時に、よく火傷をしたものです。自動車隊は、兵員・弾薬・糧秣・医薬品等々を、長距離にわたっての輸送が主任務です。その為敵から攻撃され易く、全員が歩兵訓練を受けます。特に飛行機と落下傘部隊及びゲリラ等に対する警戒警備が一番重要でした。また、満州の冬期間は、どこでも自動車

は走れますが、春の雪解期から、晩秋までは、湿地や沼地が多く、一番苦労しました。湿地通過演習の時は工兵隊のように橋を造って渡ったのです。冬期の大地が鋼鉄のように凍った時は、自動車が横向きに走るようなこともありました。

一車両に操縦手・助手・搭乗者と三名が乗車します。操縦手は運転と機関整備、助手は燃料と足回り（タイヤ）、搭乗者は積載物の確保点検と敵の飛行機やゲリラ等に対する警戒等々、それぞれ各部位について責任を持って活動しました。関東軍百万人といった。関東軍特別大演習（関特演）、ワ号・ナ号・師団演習等々の大々的演習は勿論、連隊・大隊・中隊と各各、規模の大小に係らず、実に苦しい訓練をやらされました。

ソ連との国境も長く、その国境線が黒龍江です。氷が解けて河面に春を感じ出したら漁船が出て漁労を始め、定期便の船が上り下りし出します（外輪船）と、これに警乗兵として乗船するのです。下士官と兵五・六名が現地人の衣服を着用して、対岸の地形・地物、特にソ連軍の施設等、一切目にした物体はすべて記憶

して帰って報告するのです。

私も警乗しました。大隊長から「いざ鎌倉という時のためだ、充分心して行ってこい」といわれましたから、誰にも気付かれぬように、自分自身の暗号で「日記」に非ず「時記」をメモしたものです。その時、ソ連の海防艦に停戦を命ぜられ、一寸困惑しましたが、無事でした。でも万一の場合とは、便衣の服の中で十四年式拳銃を握りしめていました。ソ連兵が去って、手には、ビッシヨリ汗が溜っていました。

昭和十九年四月より、丁度ソ連ハバロフスクの対岸で、同江や富錦という地点に、一大築城陣地構築のために師団を挙げて工事を行いました。その作業の途中の七月二十八日。大本営発令「忠霊塔に日の丸立つ」の極秘電報が師団司令部に入りました。動員下令です。即ち出動となります。

顧みれば在滿一年九か月、誠に厳しい日々でした。極寒零下四十度、また夏期は炎熱の下での猛特訓、身の毛もよ立つ思いでした。

通達があり、以後第十師団輜重兵第十連隊の号でな

く、鉄五四五部隊と呼称せよ。そして靖国神社への入門札だといって渡されたのは真鍮製の認識票です。

私の番号は「鉄五四五四・一七八・二六」でした。この札を入浴時も肌身放さず、首から左肩に掛けて左胸の上にあり、終戦後の捕虜として抑留されるまで、大切に所持していました（現在も保存）。認識票は戦死した時の身元確認のために、全軍人が肌身放さず所持していた。

八月四日、先発隊として、佳木斯第一二四部隊を出発して釜山にて乗船出航しました。門司に全船集結して船団を組んで出航しました。堂々の輸送船団でした。前後左右に、たくさんの駆逐艦や駆潜艇、海防艦に護衛されながら一路南に向かって航行しているようでしたが、時には東に向かったり北に進んだりしています。敵潜水艦の攻撃を避けての航行でした。

台湾の基隆に上陸したのは八月二十八日でした。門司から二週間して到着したのです。因みに師団通稱号は次の通りです。

師団司令部 岡本保之中将 鉄五四一〇部隊

歩兵第十連隊（岡山） 鉄五四四八部隊

歩兵第三十九連隊（姫路） 鉄五四四六部隊

歩兵第六十三連隊（鳥取） 鉄五四四七部隊

搜索第十連隊（姫路） 鉄五四五〇部隊

野砲兵第十連隊（姫路） 鉄五四五一部隊

工兵第十連隊（岡山） 鉄五四五二部隊

輜重兵第十連隊（姫路） 鉄五四五四部隊

通信第十連隊（姫路） 鉄五四五三部隊

兵器部勤務隊（姫路） 鉄五四五五部隊

防疫給水部 鉄五四五六部隊

第一野戦病院 鉄五四五七部隊

その他第二・第四野戦病院。制毒隊。病馬廄等々に通稱号を付してあった。

なお、兵団は昭和十五・十六・十七年徴集の現役兵が主幹の精銳師団でした。台湾・台中に司令部を置き、各部隊が台湾全島に分散配備に付きました。因みに鉄兵団総兵力は一万三千名であった。私は台中の南三十キロの彰化街にいました。勿論部隊本部、二大隊本部と一緒に、楠木小学校を兵舎として使用しました。各

中隊及び小隊は全島に分駐して、それぞれ任務に付いていた。中には、山奥の水力発電所まで入りこんでいました。

台中の兵団本部に毎日のように出張して命令・会報の受領等に自動車を走らせました。

ある時、近々に敵襲があるかも知れぬということで交通の要路や鉄道、特に橋梁や鉄橋に対する防御のために（煙幕作戦）材木や青草を集積せよと命ぜられたこともあり、橋や鉄橋の下等に収集しましたところ、はからずも十月十二日敵飛行機の襲撃を受けました。激少ない友軍機が迎撃に飛び立って遙か上空にて空中戦を展開しました。何分敵機の数が多くて、地上物に對しても爆弾を投下し味方の飛行場もかなりな損害を受けました。前記橋梁等は青草を燃やして煙幕を張って守りました。中には、小銃で対空射撃を行った者もいたと、後で聞きました。私は釜山を出港した時に敵襲を受け、この度で二度目の敵襲でした。一応敵の上陸もなく、ただ防衛の任務で平穩な毎日でした。

捷号作命発令により、十二月三日彰化駐屯地を出発

して、隊列を整え、嘉義より初めて南十字星が見えま
した。兵団は第一船が「青馬山丸」に乗船して、先発
しました。輸送指揮官、歩兵第三九連隊長永吉実展大
佐で部隊は、歩三九・二個大隊・搜索第十・野砲第十
・工兵第十・輜重第十の各連隊の大隊・中隊・その他
でした。

本船は「レイテ島が、目下米軍が上陸して激戦中で
ある。依って敵の後方に逆上陸して敵を粉碎すべし」
という命令を受けましたが、時既に遅く、上陸不可能
でマニラに上陸ルソン島防衛の任に付くことになりま
した。

兵団主力は十二月十三日、高雄港を出港。「江の島
丸」「大威丸」「乾瑞丸」の三船に各部隊を混成して乗
船させて、海軍の護衛艦も数少ない中を、敵飛行機や
潜水艦の攻撃の目を掠めて比島に辿り着きました。

「江の島丸」は輸送指揮官・歩兵第十岡山連隊長で、
乗船部隊は歩兵第十の二個大隊を始め野砲・輜重等の
各兵科で、ルソン島最北端のアバリ港の東方六十キロ
のカサブランカに上陸しました。しかしこの上陸に手

間取り、船舶司令部よりの命令で揚陸兵器及び物資を
半数船舶に積んだまま、台湾へと引き返しました。

「大威丸」は輸送指揮官・歩兵第六十三連隊の林部
隊長で、乗船は歩兵第六十三連隊の二個大隊を始め各
兵科の大・中隊とその他が分散乗船して二十三日十時
に北サンフェルナンド港に入港、全兵員・全物資を揚
陸しました。

これ以下の私の行動(労苦)は、平和の礎に「比島
散華」と題して掲載をさせて頂いています。

「乾瑞丸」は輸送指揮官・輜重第十連隊長鍋島英比
古閣下の下に各兵科が乗船し、入港三十分前に、敵潜
水艦の発射せる魚雷三発を船腹に受けて轟沈しました。
瞬時にして一千二百余名が水く屍となられたのであり
ます。波穏やかな紺碧の海底深くに今も御遺体は眠り、
御霊は天翔けて故郷へ、また靖国のお社へ行かれたで
しょうか。

上陸部隊はそれぞれの戦場において、死力を尽くし
て戦われました。その状況たるや、凄惨・壮烈そして
悲惨の極でした。一片の肉片すら残さぬ爆死、擦過傷

にて皮膚は破れ血腫とウジ虫にさいなまされ、貫通銃創を受け、弾丸や破片が体内に食い込んだままで、看護も手当もなく戦いながら戦場の露と消え去った戦友。

制空権は敵が制して、我が物顔で飛び回り、中でも観測機が超低空飛行をして（搭乗者の顔）笑いながら、手榴弾を投擲して去る始末です。地上軍は、私達の想像も出来なかった装甲の厚い重戦車を押し進め、火炎放射器で焼き払い、長距離砲での集中砲撃等々。どれ一つ取っても大刀打ち出来る戦争ではなく、ただ単なる労苦として、一片の書にすることは出来得ぬ戦争でした。

すべての補給が途絶して、精神刀のみでの戦は無茶苦茶です。飢餓が迫り、病魔が襲って来ました。誠に凄惨というか、壮烈無比の生地獄を私は体験しました。その上に戦後の抑留生活（PW）としましても最大の屈辱を体験させられました。武勲を立てた英霊は一言も語らず、また、幾十万の敗戦の兵も黙して語らずであります。ただ二度と戦争を行っては駄目だ。平和ぐらい尊いもの、有り難いものはない。半世紀を経た

現在も悪夢にうなされている。合掌。

【解 説】

平和を祈念し世界の恒久平和を維持するための事業の重要な課題の一つは戦没者慰霊である。特にフィリピンにおいては概数五十一万八千四百名の軍人、軍属が非命にたおれ、まだ御遺骨の収集されぬ地域もある。

執筆者松田勇氏は本書において、第十師団輜重兵第十連隊の満州駐留、比島への海上輸送中の惨事、上陸後終戦に至る苦難を記されておる。同氏は更に、度々ルソン島現地に御遺族共々慰霊巡拝、慰霊祭を挙行されている。

同部隊は、昭和十五、十六、十七年徴集（大正九十・十一年生れ）の現役兵を主体とした精強兵団であるが、輸送途次僚船を失い、戦備未だ整わざるうち、昭和二十年の上陸米軍と戦闘し、損耗率九十％という玉碎に近い犠牲を出した。

同氏等は先年挙行の鉄五四五四会（輜重兵第十連隊生存者、遺族）の慰霊巡拝に参加された。その時の

「慰霊のことば」を次に記し、解説の一部にかえる。

『帝國陸軍第十師団輜重兵第十連隊は、姫路を後にして、満州国三江省樺川県佳木斯に移動しました。部隊称号、満州第一二四部隊として北滿鎮護の任につきました。

部隊は関東軍特別大演習（関特演）や七号、十号等の演習に参画し、また師団、連隊等の演習・訓練を行い、特に冬期作戦は零下四十余度の中の輸送任務や、水上・雪原演習は、将兵軍馬共疲労の極に達しました。

また雪溶けの湿地通過訓練は、身を切るような水中に胸まで入っての車両通過も敢しく、夏期作戦は、三十余度の猛暑炎熱の中でした。昼夜転倒の訓練もありました。列挙致しますと際限なくありました。軍人は勿論・軍馬・諸兵器を最大限有効活用して、磨きに磨き、鍛えに鍛えし精鋭部隊でした。

昭和十九年春、満州国東北隅、富錦地区に一大築城演習の名の下に、師団を挙げて参画し、対ソ戦闘に備えての陣地構築に全力を尽くしました。当時の日本軍は、支那大陸をはじめ、全戦線にて悪戦苦闘の最中で

なかでも対米戦線は随所において日夜死闘が続いていました。

昭和十九年七月二十八日「忠霊塔に日の丸立つ」の極秘電文が大本営より発令されました。

第十師団の動員でした。わが部隊も即出動でした。一部警備要員の残留での別れが残念でした。第十師団は通称号「鉄兵団」と呼称し、輜重兵第十連隊は鉄五四五四部隊で、第一中隊は鉄巖隊、第二、第三と各中隊も各々名称を付し、第六中隊は結誠隊と編成し、釜山港より乗船、八月一日台湾基隆に上陸しました。兵団は台湾全島守備のため、各部隊それぞれに駐留・配備しました。十月十二・三日の台湾海空戦に参戦しました。

十一月末、捷号作戦で、再度出動命令発令。高雄港に集結しました。この時点において、幾多将兵が熱帯病に倒れ入院残留されしは心残りでした。

先発隊は「有馬山丸」にて、一足早く比島に向かつて出航し、本隊は「乾瑞丸」「大威丸」「江の島丸」に分乗し、出航しました。「有馬山丸」はマニラ港の上陸

など輸送任務につきました。「江の島丸」はルソン最

北端のアバリの東カサブランカに上陸し、一路南進しサンホセに向かって進軍しました。「大威丸」は北サンフェルナンドに入港・揚陸作業に専念していました。

時・昭和十九年十二月二十三日十一時三十分、遙か北方洋上に一大爆発音を察知しました。一足遅れていた「乾瑞丸」が敵潜水艦の魚雷攻撃で一瞬にして海の藻屑と化しました。輸送指揮官、陸軍少將鍋島英比古閣下、他数千柱の将兵がリンガエンの海に水く屍として散華せしは、無念の極みでありました。

爾後第十四方面軍、尚武集団はルソン島における一大持久作戦をとり、鉄兵団はサンホセ付近に集結し、ルソン中部のカラバリヨン山系・バレテ峠にて敵対迎撃の布陣をすべしでした。わが部隊は全力を挙げて、名前線陣地に対して弾薬・糧秣の搬送に一寸の休憩もなく二十四時間体制で勉強しました。

サラクサク峠に布陣せる撃兵団陣地にも救援のため出動しました。軍馬は斃れ、自動車は燃料なく、ただあるは輜重兵魂だけ。全員が臂力搬送でその重責を全

うしました。

戦況ますますわれに利あらず、制空権は敵の手にあり、重火器を存分に駆使して最前線に迫って来ました。日一日と友軍陣地は失陥し、いよいよバレテ峠全面に肉迫して来ました。

岡本師団長はわが鉄第五四五四部隊に第一線出動を命ぜられ、米倉大隊は勇躍して自動車男の花道だと颯爽として妙高山陣地に向かって出動されました。時すでに遅く、着陣早々より強力なる敵機動部隊と戦火を交え、第一日より多くの戦没犠牲者が出ました。

以来空爆と長距離砲撃、それに加えて地上軍重戦車での反復攻撃等々、これらに堪えて戦いぬき、最後には撃つ弾なく、雄叫びは銃声に消え、飲まず食わずで最後の一兵になるも頑張るぞの心意気でした。

かくして防戦八十余日、さしもの勇士も二十余名となり、六月一日マンガン基地に帰着しました。

旬日を出ず、鉄兵団、カシブ盆地集合の命あり、満州よりの愛しの車を大ハンマーで打壊し、夜陰に紛れてマンガン基地を後にしました。カシブにて七月十

四日まで兵器の整備・糧秣の収集に全力を挙げ、志氣・体力を養成し、次地点ピナバガンに向かって転進しました。

三週間の進軍は、まるで地獄絵図のよう、激流さかまく谷を渡り、野猿たわむる密林を縫い、虫も鳴かず鳥も飛ばない峯越えて、悪疫と疲労、その上食糧は欠乏し、斃れ行く勇者数知れず。「混濁する意識で呟く言葉は、まるで童児のように、とりとめない言葉を、きれぎれに口の辺に発し、遠き過去、そして故郷の山や川、愛しき人や、はらからに、想いをはせるかのよう」胸の鼓動静かに止まり、夜の霧雨が最後の水となる。今想い起こしてもただ、涙あるのみの惨状でした。

八月二十五日、尚武作命第二〇〇三号が発令されました。九月十日に本部より伝達され終戦を知りました。九月十九日ジョネスにて、敵に武器を渡し、鉾を収めました。

かくして伝統ある輜重兵第十連隊はすべて終わりました。

顧みますれば、北滿や台湾にて陣没された戦友。リ

ンガエンの海深く水く屍となられた御霊。バレテ妙高山をはじめ全比島戦線に、称えても讃えきれぬ嚇々たる武勲を立てて散華され護国の鬼となられた各々御英霊の泰らけく眠られんことを、心より念じ慰霊の言葉とします。』

第十四方面軍（軍司令官 山下奉文大將）の態勢

一、マニラ東方拠点（振武集団）

二、クラーク・フィールド西方拠点（建武集団）

三、北方拠点（方面軍主力、尚武集団）

尚武集団配備

1. リンガエン地区

2. サンホセ地区

3. ルソン西北岸地区

4. アパリ地区

5. バレル湾・ゲンガラ湾地区

6. サンフェルナド地区

米軍概況

一月九日 米軍リンガエン湾南岸に上陸開始

二月六日 マニラ郊外に到着

二月十五日 バターン半島上陸開始、コレヒドールに落下傘部隊降下、洞窟陣地自爆

二月二十三日 マニラ旧市内に突入

三月十日より比島諸島（ミンダナオ・セブ島）を占領開始。

三月中旬より地上戦闘焦点は、パギオからバレテ峠の山岳地帯に移る。方面軍は山岳地帯に立籠り永久抗戦、終戦に至る。

比島作戦の米軍死傷者不明者六万六百余。

比島フガ島戦について

滋賀県 船橋 利平

私は大正十二年十月十七日生まれで、昭和十八年徴集の第一補充兵役であります。昭和十九年二月一日召集令状により敦賀歩兵第一一九連隊に応召しました。

その後、敦賀、京都の連隊からそれぞれ各二個大隊ずつで独立混成第六十一旅団（旅団長・田島彦太郎少

将）が編成され、七月三十一日各地より門司に集結、混成艦第一〇二九部隊（総人員五千七百名）となり八月二日「照国丸」に乗船、夕方門司港を出航し、五島列島に二十八隻の船団が集結、八月四日、祖国を後に一路南下しました。

敵潜水艦の執拗な攻撃や悪天候に苦しめられ、船団の約半数が支那方面に転進、また二隻が撃沈されるなど、多くの犠牲を出しましたが、八月十日、「照国丸」などは台北基隆港に辿り着きました（文字通り辿り着いたという感じである）。

その後、高雄港に移り待機していたが、昭和十九年九月十日ごろ突然先発隊に出発命令が出され、八十名余りの先発隊が四隻の機帆船に分乗し、十二日夜高雄港を後に南下、バシー海峡を無事通過しバタン諸島のバタン島バスコに到着しました。この島には南方軍師団司令部が置かれていました。

兵隊は椰子の木陰に幕舎（携帯用天幕）を張り、数日を過ごす。食料は現地民の民家からニワトリ、卵を調達。衣類との物々交換です。この島にも敵艦載機二